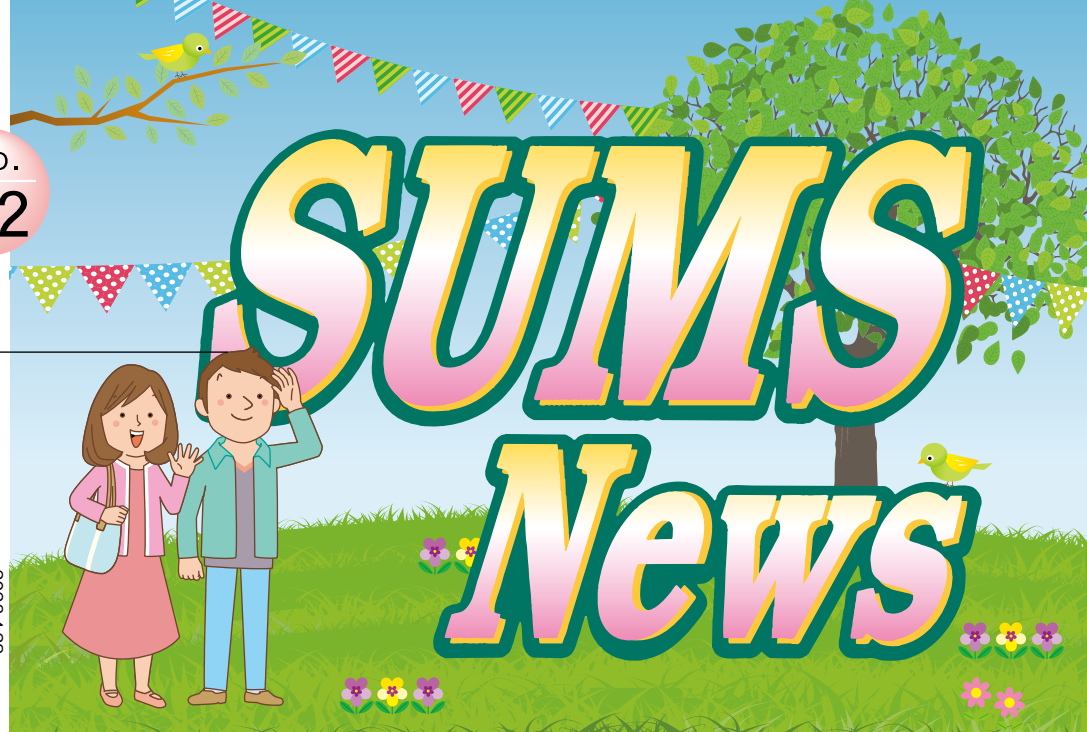




令和5年度入学式を挙行了しました

4月4日(火)白子キャンパス講堂において、令和5年度入学式を行い、学部633名、大学院18名が新たな一歩を踏み出しました。新型コロナウイルス感染症がようやく落ち着きを見せる中、来賓の方々にもご臨席を賜り、今年は4年ぶりに入学生全員が一堂に会して入学式を挙行了しました。

豊田長康学長は、「私も教職員は、本日入学された皆さん全員が資格試験に合格していただくよう、全力でサポートいたします。最近の医療・福祉の現場では、さまざまな専門職からなるチームの一員として、ご自身の専門性に基づいた実践と共に、他の専門職と適切なコミュニケーションをとり、チームとしての力が最大限発揮されるような貢献が求められます。本学では、皆さんがそのようなチーム医療にスムーズに貢献できるよう、医療人底力実践や多職種連携教育など、さまざまな教育プログラムを準備しています。ぜひともキャンパスライフを楽しみ、『知性と人間性を兼ね備えた医療・福祉スペシャリスト』に成長されることを期待しています」と式辞を述べました。

また、高木純一理事長は祝辞で「大いに青春を謳歌し、生涯の友を作ってください。しかし、学ぶことを疎かにしない、ということを守ってほしいのです。教職員全員が全力で皆さんをサポートしていきますので、資格試験のストレート合格を目指して1年次からしっかりと勉強に取り組んでください。『天は自ら助くるものを助く』という諺のとおり、自分の将来への切符は自らの努力で勝ち取ってください。コロナはいずれ終息しますが、人口減少と超高齢化という深刻な問題が待ち構えています。医療や福祉はますます重要なものになり、医療・介護が製造業にとって代わり、日本最大の産業になる日も近いと言われています。どうか皆さん、本学でしっかり学び、日本、世界を問わず社会に貢献できる、医療・福祉のスペシャリストを目指してください」と激励の言葉を贈りました。

入学生代表として臨床検査学科の山村悠月さんが、「最新の教育環境のもと、医療・福祉の様々な分野を志す仲間と支え合い切磋琢磨しながら、医療人としての自覚を持ち、広い視野や思考力・判断力・表現力を身に付けたいです」と宣誓をしました。〈庶務課〉



高木純一理事長



豊田長康学長



＜建学の精神＞

科学技術の進歩を真に
人類の福祉と健康の向上に役立たせる

＜教育の理念＞

知性と人間性を兼ね備えた
医療・福祉スペシャリストの育成

＜教育目標＞

- ① 高度な知識と技能を修得する
- ② 幅広い教養を身につける
- ③ 思いやりの心を育む
- ④ 高い倫理観を持つ
- ⑤ チーム医療に貢献する

国家試験合格 おめでとうございます！

臨床検査技師国家試験結果について

保健衛生学部 臨床検査学科 准教授 前河 裕一、臨床検査学科長 米田 操

2月15日(水)に第69回臨床検査技師国家試験が施行され、3月23日(木)に厚生労働省のホームページで合格者が発表されました。本学臨床検査学科では54人が受験し50人が合格し合格率は92.6%でした。全国の受験者数は5002人、合格者数は3880人で合格率は77.6%でした。昨年の全国の合格率は75.4%で今後も75%前後の合格率で推移していくことが予想されます。

現在の就職希望として医療系に進みたい学生が増えているように感じます。医療現場で働くためには必ず国家試験に合格しなければなりません。他の医療職も同じですが、臨床検査技師の国家試験に合格するためにはかなりの勉強量が必要となります。臨床検査技師として病院、検診センターやその他医療に関わる企業などで働くことは、人の病気を早期に見つけることや病気を治療することに繋がっています。人の命に係わる職業なので知っておかなければならないことが沢山あります。本学臨床検査学科の教員一同、さらに気を引き締めて一人一人の学生と向き合うようにしたいと思っております。

「社会福祉士国家試験」過去最高の合格率80%を達成（新卒者）

保健衛生学部 医療福祉学科長・医療福祉学専攻長 藤原 芳朗

第35回社会福祉士国家試験の合格者発表が、3月7日(火)にありました。

その結果、本学医療福祉学科、医療福祉学専攻を今春巣立った卒業生は、今回を含め16回の国家試験のうち最高の80%の合格率（公益財団法人社会福祉振興・試験センターによる全体の合格率は44.2%）を達成することができました。精神保健福祉士とのW受験をした学生も全員が合格しました。また、卒業生の4割を超える学生が公務員や社会福祉協議会等の公的機関に就職することができました。

今後もさらに国家試験の合格率を高める指導に取り組みます。

第36回臨床工学技士国家試験合格発表 合格率100%を達成

医用工学部 臨床工学科 准教授 山田 康晴、准教授 中村 太郎、臨床工学科長 丸山 淳子

令和5年3月5日(日)に第36回臨床工学技士国家試験が施行され、3月24日(金)に厚生労働省のホームページで合格発表がされました。

本学臨床工学科では50人が受験し合格率は100%でした。（全国の新卒合格率は92.8%）

学生が最後の最後まで諦めず、頑張った成果です。今後も学生とともに、教員一同も全力で学生と向き合い頑張っていきます。

国家試験頑張って！食事会

1月25日(水)毎年この時期に国家試験を目前に控えた4・6年生を激励する会として、学生寮の寮生を対象に「国家試験頑張って！食事会」として応援メッセージとお弁当の配布を行いました。

コロナ禍以前は食事会を行っていましたが、新型コロナウイルス感染防止の観点から、昨年度に引き続き応援メッセージとお弁当の配布を行いました。

下級生からは「最後まで悔いの残らないよう頑張ってください！」とエールを送るコメントや体調を気遣うコメントが、4・6年生からは国家試験に対する抱負や下級生へのアドバイスが送られました。

また、高木久代副学長や寮母さんからのコメントもあり、プレッシャーの日々を過ごす4・6年生の皆さんの励みになれば幸いです。

当日は47名の寮生がお弁当を受け取り、一人一人が寮母さんから温かい言葉をいただきました。学生の安全を考え、例年通りの食事会を開催することはできませんでしたが、本年度もこのような形で国家試験を受ける4・6年生を応援する機会が持てたことを嬉しく思います。このように学生寮では感染防止対策を十分行ったうえで、学生寮生の交流を深めています。

＜学生課＞



強化指定クラブ『女子バスケットボール部』の発足について

学友会顧問 高木 久代

令和5年4月より、本学で初めて強化指定クラブとなる『女子バスケットボール部』を発足します。

これは、本学に強化クラブを設け、勉学とスポーツを両立させる教育によって、心身ともに健全な人材の育成を目的に、医療・福祉の総合大学である本学の特徴を活かした学内連携（医療・栄養・スポーツトレーナー・鍼灸・リハビリ）や、加盟協会・関連諸機関等との学外・地域連携を推進する中で、一貫した技術指導を通してチーム力強化を図り、近い将来、本学女子バスケットボール部が強豪校として活躍し認知されることを目標に、新しくスタートを切ろうとするものです。

監督には、高校女子バスケットボール界でご活躍された横山俊幸氏を招聘し強化に取り組みます。横山氏は、三重県バスケットボール協会役員を長年歴任する傍ら、ご自身が指導するチームをインターハイ11回・ウィンターカップ15回の出場に導き、インターハイでは全国3位入賞を成し遂げられました。

今後、本学在学生の皆さんはもとより、本学に入学し、女子バスケットボール部での活動とともに、将来広く社会の発展に貢献する医療人を目指す高校生の皆さんへも、入学や入試・学びに関することや、大学・クラブ見学（説明会）等の機会を設けていきますので、興味・関心のある方は、是非ご参加ください。

なお、女子バスケットボール部の強化指定は東海地区の医療系大学で初、三重県の高等教育機関でも初めての取り組みになります。

どうか多くの方のご参加・応援等よろしくお願い申し上げます。

救急救命学科の大西健児教授が受賞

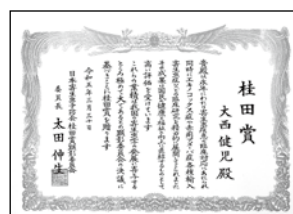
副学長（大学院・研究担当） 鈴木 宏治

3月30日(木)に石川県金沢市で開催された第92回日本寄生虫学会大会において、本学救急救命学科の大西健児教授が「第70回桂田賞」を受賞されました。日本寄生虫学会は、寄生虫及び寄生虫病に関する学術の研究や進歩と普及を図ることを目的としており、桂田賞は寄生虫学の発展に寄与した研究業績に対して(財)日本寄生虫予防会が顕彰する伝統ある賞です。

今回の受賞における大西教授の主な功績は以下のとおりです。

- ・日本全国の医師から日本寄生虫学会へ寄せられた寄生虫症例の治療に関する具体的な問い合わせへの長年にわたる対応への貢献（診断方法、治療に使用する薬剤名、薬剤投与量や投与法、治療効果検証法など）
- ・寄生虫症、特にエキノコックス症、条虫症、赤痢アメーバ症に対する臨床研究成果に対する高い評価（エキノコックス症患者からの分離株確立、日本海裂頭条虫症およびアジア条虫症に対するプラジカンテルの投与量の決定、HIV感染に合併した有症赤痢アメーバ症の治療法など）

大西教授の今後の研究が更に発展されることを期待しております。誠にありがとうございます。



本学教員の新刊案内「知っておくべき寄生虫感染症」

編集：保健衛生学部 救急救命学科 教授 大西健児

出版：医歯薬出版株式会社（2022年4月1日発行）

寄生虫症は日本人医療従事者にとり、苦手意識の強い疾患です。しかし、日本人の内科系医師は国内感染寄生虫症のみならず、海外感染寄生虫症にも対応しなければならなくなっています。本書は26の寄生虫疾患について、実際に症例を経験した医師たちに執筆を依頼し、疾患別に診断と治療を中心とした内容となっております。本書の主対象は内科系臨床医ですが、臨床検査技師や臨床検査学科の学生にとっても有用な情報が含まれています。



看護学科の学生が人命救助を行い、感謝状を贈呈

看護学部長 倉田 節子

4月7日(金)商業施設にて人命救助を行った看護学科4年の大山那月さんに、豊田長康学長から感謝状と記念品が贈られました。

一般市民の方より、「今年2月に商業施設で具合が悪くなり、倒れたところを助けていただいた」とお礼のお電話をいただきました。大山さんは倒れそうな状態になっている老婦人に対してためらうことなく声をかけ、自身のスマートウォッチで血圧測定などを行いました。また、同伴の娘さまから既往歴を聞き出して簡易血糖測定器で血糖値を測定し、その後、自ら救急車を依頼して状況を伝達しました。

大山さんは、「同伴の方は動揺してうろたえていたので、助けなければと駆け寄りました。看護学科での臨地実習を終えたばかりで、観察項目がすぐに浮かび、自然に体が動いて対処しました」とのことでした。豊田学長は「見て見ぬふりをする人も多い中で、大山さんの行動はとても勇気があり医療人として素晴らしいです。これからも頑張ってください」と感謝を伝えました。



2022年度「事例で学ぶ多職種連携」授業の報告

多職種連携教育委員長 吉子 健一

2022年度「事例で学ぶ多職種連携」の授業が、2023年3月20日(月)、23日(木)、24日(金)の3日間、白子キャンパス1号館において67名の学生参加のもと実施されました。1日目、多職種連携の意義と歴史、国際生活機能分類等について学び、さらに自職種の専門性を確認、事例に関する情報交換を行いました。2日目、ケアプランを作成し、その発表によって他のチームのケアプランを共有しました。3日目、模擬患者さんとのカンファレンスを行い、ケアプランの提案、カンファレンス結果報告会やケア計画の振り返りで学びの共有を行いました。模擬患者さんからは、「わかりやすく説明してもらい不安が解消した」など好評をいただき、担当教員からは、「専門職種としての視点が妥当である」との評価をいただきました。本授業が対面授業として実施でき、学生が多くの学びを得たことを大変うれしく思います。



新3年生の皆さん、本授業を受講してみませんか。新4年生の皆さん、「実践で学ぶ多職種連携」を受講し本学の多職種連携教育ピラミッドの頂点を目指しませんか。これらの授業を履修した学生には、「多職種連携教育修了証」が授与されます。詳しくは、2023年度前期ガイダンスのリーフレットをご参照ください。多くの学生が本授業を受講され、自職種の専門性はもちろん、他職種や多職種連携に関する知識をより深めていただくことを願っています。

2023年度 第2回SUMS学科横断的共同研究費助成の助成対象者が決定

医療・福祉の総合大学である鈴鹿医療科学大学（SUMS）における統合医療・医療福祉関連研究の発展に寄与する課題の解決を目指す目的で設置された、SUMS学科横断的共同研究費助成の第2回研究費助成の対象者が決定しましたのでお知らせします。

応募のあった3課題の研究内容について、社会連携研究センター運営委員会委員に評価していただき、その評価結果に基づく理事長及び学長の裁定の結果、2023年度は以下の3課題が助成対象になりました。

なお、本事業は次年度も引き続き実施する予定です。宜しくお願い申し上げます。

研究代表者 (所属学科)	研究分担者 (所属学科)	研究課題名	助成金 (単位：千円)
大井一弥 教授 (薬学科)	有馬 寧 教授 (鍼灸サイエンス学科) 平本恵一 准教授 (薬学科) 上田祥子 助教 (看護学科) 田中章太 助手 (薬学科)	抗がん薬であるイリノテカン投与による色素沈着発現に対する基礎と臨床の融合研究	750 千円
三輪高市 教授 (薬学科)	有馬 寧 教授 (鍼灸サイエンス学科) 郡山恵樹 教授 (薬学科) 草川裕也 准教授 (リハビリテーション学科)	高血糖負荷による中枢神経機能障害への影響とその改善のためのメカニズムの解明	750 千円
森 尚義 准教授 (薬学科)	大井一弥 教授 (薬学科) 渡部秀樹 教授 (看護学科) 中西健二 准教授 (医療福祉学科) 藤澤 豊 助手 (薬学科)	皮膚の状態がフェンタニル製剤の経皮吸収に及ぼす影響	500 千円

＜副学長（大学院・研究担当）鈴木宏治＞

令和4年度 実験動物感謝式

動物実験施設運営委員会 委員長 三浦 俊宏

令和4年度の実験動物感謝式を3月8日(水)に千代崎キャンパス実験動物施設横の動物慰霊碑前に行いました。新型コロナウイルス感染防止のため、昨年同様に私と研究振興課員の少人数で行いました。

令和4年度に犠牲となった実験動物数は、マウス1,198、ラット258、モルモット8匹、鶏胚90羽の合計1,554匹(羽)でした。これは昨年より342匹の減少です。また、年間承認件数は、新規3件、継続12件、計画変更4件となっています。

本学では動物愛護の精神に基づき、動物に無用の苦痛を与えないように細心の配慮を行っています。動物実験に関する講習会を必修とし、また実験計画が本学で定めた動物実験指針に適合しているかを厳正に審査しています（動物実験指針および動物実験倫理委員会規程は本学ホームページで公開しています）。

＜研究振興課＞



薬学研究科・薬学部の取り組み

薬学研究科 第6回学位論文発表会を開催

薬学研究科長 飯田 靖彦



1月25日(水)白子キャンパスにて、薬学研究科の第6回学位論文発表会を行いました。前日からの大雪で来場が困難となる中、午後に始まった学位論文発表会では大学院4年生の堀川恒樹さん、佐藤雅也さんの2名が博士論文研究を発表しました。新型コロナウイルス感染症による自粛も3年目となり、制限された中で研究活動を行わなければならない状況にもかかわらず、各々、緻密に研究を重ね、得られたデータを精査し、新たな展開へと導く高度な研究内容となっており、予定時間を超えて活発な討論が行われました。

今年の学位論文発表会では、堀川さんが「糖尿病マウスにおける保湿能とダバグリフロジンによる皮膚障害発現に関する研究」について、佐藤さんが「認知機能への高血糖の影響に関する研究」について発表を行いました。堀川さんは炎症と皮膚障害に関するこれまでの検討を基に、問題となっている糖尿病治療薬による皮膚障害の誘導メカニズムについて詳細に調べ、また佐藤さんは高血糖が認知機能に与える影響、さらには原因物質の推定に至る一連の研究を簡潔にまとめており、いずれも今後の発展に期待が持てる素晴らしい内容で、本学の学位を得るに相応しい研究発表でした。

本年度の学位論文は、いずれも社会の発展に貢献する研究内容であり、今後もこのような質の高い研究を発信するとともに有能な人事の育成に努めます。

薬学部で入学前教育を実施

薬学部 薬学科 准教授 石嶋 康史

薬学部薬学教育センターでは、昨年度から総合型選抜や学校推薦型選抜の合格者を対象として、少しでも早く大学の雰囲気慣れしてもらえるように薬学部独自の入学前教育を開始し、今年度も2月初めから入学直前まで実施しました。昨年度は、薬学の基礎となる物理や化学や生物についてeラーニングシステムを利用した問題演習とオンデマンド配信による解説講義を行いました。今年度はハイブリッド方式による実施とし、入学前登校日を2週間毎に計5回設けて、来学することが可能な参加者には、実際に大学の教室で解説講義を受講していただきました。また、新たな試みとして、在学生の協力を得て入学前登校日に上級生との交流会や学内見学を実施しました。上級生から入学後の注意点なども助言され、参加者は熱心に質問していました。勉強だけでなく、入学する前から大学の授業で利用するeラーニングシステムの使い方を身に付けたり、来学した参加者は同級生の友人を作ったりすることもできました。今回の取り組みにより、新入生が入学後にスムーズに大学の学習に接続できることを期待しています。

来年度以降も一般選抜合格者への対象拡大などを検討し、高校と大学の橋渡しとして、新入生の入学後の生活に貢献できるようにバージョンアップしながら継続していきたいと考えています。



解説講義風景



学内見学

海星中学校・高等学校と高大連携協定を締結



3月24日(金)に本学と海星中学校・高等学校は、高大連携に関する協定書の調印式を行い、本学の豊田長康学長と海星中学校・高等学校の服部芳尚校長が高大連携協定を締結しました。

協定を交わしたことにより、今後大学は教員の出張講義や生徒を招いた模擬実習を行い、医療・福祉・健康分野への理解を深めるキャリア教育や探求活動の支援を実施することで、教育の連携を強化して双方の発展へつなげていきます。

<入学課>

鈴鹿市との学官連携「ものづくり体験教室」を開催

保健衛生学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻 4年 岩佐 紗衣・大崎 紗空・伊藤 美紀
高田 健斗・堀川 晴陽・永谷 昂暉

10月26日～11月30日の期間、全4回にわたり、鈴鹿市との学官連携「ものづくり体験教室」を開催しました。65歳以上の方を対象に孤立予防、健康促進、趣味づくりを目的とし、24名の方に参加していただき陶芸づくりに取り組みました。

教室の1回目は自己紹介、私たちが考えた自宅でもできるオリジナル体操、陶芸作業の説明、2回目は陶芸粘土の成形、3回目は模様付け、釉薬がけ、鈴鹿市の集いの場の紹介、4回目は作品披露、記念撮影など、陶芸作品を制作してもらうほか、教室終了後の繋がりへのきっかけとなる活動を実施しました。これらの企画は、私たち作業療法学専攻の学生が中心となって検討し、鈴鹿市との打ち合わせを重ねて実施しました。参加者の皆様からは、「学生の皆さんと話すことができてパワーをもらえた」「知り合いができて良かった」「ぜひまた開催してほしい」などの声を聞くことができ、少なからず貢献できたことを実感しました。

今回、企画から携わる貴重な経験ができ、地域と連携する大切さを改めて感じることができました。この経験を活かし日々の学習をより一層頑張って、地域に貢献できる作業療法士を目指したいと思います。なお、参加者の皆様には研究に協力いただき、取り組みの成果を卒業論文としてまとめる予定です。



市民公開講座を開催

臨床工学科主催「カレンダーの数理」

医用工学部 臨床工学科 准教授 山田 康晴

2月19日(日)千代崎キャンパス JART 記念館大講義室において、臨床工学科主催による市民公開講座を開催しました。小学生から一般市民の方、教職員の方々にご参加いただきました。今回は、「カレンダーの数理」というテーマで、臨床工学科の桑野泰宏教授にご講演いただきました。

日本で明治5年まで使用されていた「太陰太陽暦」の仕組みや六曜（先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口）について、また、ローマ歴から続く現代の太陽暦についての解説をいただきました。現在使用されているグレゴリオ暦について、閏年のパターンや曜日について400年周期で変化することについても話されました。

地球から見て、太陽は1年かけて通り道である黄道と天の赤道の交点の位置から移動して元の位置に戻り、その時間を太陽年と呼びます。このため、暦の制作には天文学の知見が欠かせないことや、「時」の捉え方は、国や社会、文化、民族、宗教などにより、異なることも説明され知識が深まりました。

小学生から理解できる内容で、暦の力についてわかりやすく教えていただきました。



リハビリテーション学科主催「心筋梗塞に対するリハビリテーション-生活習慣病に対する運動療法-」

保健衛生学部 リハビリテーション学科 前教授 高橋 猛

2月20日(月)千代崎キャンパスB講義棟3513教室において、リハビリテーション学科理学療法専攻主催による市民公開講座を開催しました。開催教室は大きな教室でしたが、参加者は125名（一般市民35名、学生65名、卒業生・教職員25名）と多く、また講座終了後にはCNS・CTY（ケーブルテレビ）から取材も受け、2月24日(金)に放送されました。

内容は、臨床経験とガイドライン、エビデンスを基に「心筋梗塞に対するリハビリテーション-生活習慣病に対する運動療法-」についてお話をさせて頂きました。日本人の死亡原因の第2位と言われている心筋梗塞は予防が大切であり、心筋梗塞の予防は運動が大切であり、その効果のエビデンスは確立していることを説明しました。加えて、予防は心筋梗塞発症前の生活習慣病に対する予防と2次予防である再発予防には運動療法が大切と話を進めました。

今回の市民公開講座では、参加市民の方にゴムバンドと運動資料を渡しましたが、そのことによって運動習慣がつくことを願っています。



救急救命学科主催「上手な小児救急のかかり方-かかりつけ医を持とう-」

3月25日(土)白子キャンパス1号館において、救急救命学科主催による市民公開講座を開催しました。あいにくの雨模様と周知期間が短かったにもかかわらず20名の参加がありました。

小児科専門医である本学救急救命学科の東川正教授による、「上手な小児救急のかかり方-かかりつけ医を持とう-」と題して、こどもの病気の実状、ワクチンの重要性、パッと見の判断の仕方、「あるある」事例こんなときどうする、日本小児科学会ホームページや子ども医療ダイヤル#8000の活用方法について分かりやすく説明していただきました。

講演会後の参加者へのアンケート結果では、講演内容に関して、「満足」(70%)または「やや満足」(30%)と回答していただきました。来場者からは、「とてもわかりやすく、ていねいに教えていただき、とても勉強になりました。以前から市民向けのこういった公開講座をさがしていましたが、全然なくて、今回、たまたま小児科受診時に待合室でパンフレットをみつけました。今日の日はとても楽しみにしていました。勉強になることばかりで次回もぜひに受講したいです。ありがとうございました」との感想をいただきました。また、来年度の公開講座にも多くの方から参加したいとの感想もいただき、無事に終了することができました。来年度以降も継続的に開講予定ですので、皆様のご参加をお待ちしております。

<救急救命学科>

小児救急と予防接種

保健衛生学部 救急救命学科 教授 東川 正宗

小児救急は多くの軽症例の中に少数の重症例が紛れ込んでいるところに難しさがあります。特に、化膿性髄膜炎は後遺症や死亡するリスクの高い疾患です。小児の髄膜炎の起因菌としては、インフルエンザ菌と肺炎球菌の2つが重要です。いずれの菌も莢膜多糖体を有し、4-5歳未満の乳幼児は莢膜多糖体に結合するIgG₂抗体を作ることができず、これらの菌の侵襲性感染症の高リスク群です。しかし、莢膜多糖体とキャリア蛋白を結合させることで、乳幼児でもT細胞依存性の抗体産生ができるように工夫したワクチンが開発されました。

これらの菌には、多くの莢膜型が存在し、莢膜型によりヒトに対する侵襲度が異なります。インフルエンザ菌はb型が最も侵襲性が強いのでb型に対するワクチンが作られ、Hib（ヒブ）ワクチンとよばれています。一方、肺炎球菌は90以上の莢膜型があり、侵襲性の高い13個の莢膜型を混合した13価ワクチンが使用されています。

本邦では、これらのワクチンの導入が欧米に比べ10-20年遅れましたが、2013年度から定期接種化され、化膿性髄膜炎の発症が激減しました。ワクチン接種後であれば、化膿性髄膜炎のリスクは低くなり、発熱で救急外来を受診する小児患者の診かたが大きく変わります。本邦でのこれらのワクチン導入に当たっては、三重病院の神谷齊先生、庵原俊昭先生らのご尽力されました。現在も、三重県はワクチンの臨床研究に多大な貢献をしています。

医用情報工学科の学位授与式で優秀発表者を表彰

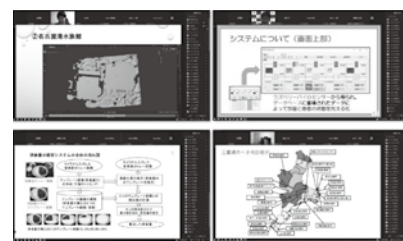
医用工学部 医用情報工学科 教授 鶴岡 信治

医用情報工学科では卒業研究発表会をオンラインで2月20日(月)に開催しました。発表会は卒業研究生29名全員が1人10分の説明に5分の質疑応答で行いました。研究内容は、最先端の医療福祉システムの研究開発、日常生活に役立つシステム開発、災害のシミュレーション、現場の医療健康に関する調査まで幅広く、全員、卒業研究にふさわしい研究成果を発表しました。卒業研究のタイトルは、本学科のホームページに公開されているので、参照していただけると幸いです。

発表会の質疑応答は、下級生からも素朴な疑問や核心を突くような質問が多数出て、発表者が戸惑う場面もありましたが、活発な意見交換を体験しました。また当日参加できなかった方のために、Zoomでレコーディングし、オンデマンドで視聴できるようにしました。そして、優秀発表者の選定は、参加した全学生と全教員が1位と2位を投票し、投票結果により決めました。

学科学位授与式では、学位記の授与の後、卒業研究の優秀発表者を表彰し、学科長を始め、各教員からの挨拶が行われました。

新型コロナの感染防止のために、インターネット技術を活用した授業形態が増えましたが、大学生活最後の挙手により、多くの学生はポジティブにとらえており、教員一同は安心しました。このような体験を活かし、現在進展しているAI・データ時代をリードする人材となることを祈念し、学位授与式を終えました。



卒業研究発表会のプレゼンの例

不登校生のための適応指導教室での講演

保健衛生学部 医療福祉学科 助教 上條 史絵

令和4年度卒業生の濱岬咲さんが、1月19日(木)に鈴鹿市教育委員会設置の適応指導教室「けやき教室」の保護者の会「ほっとさろん」で、自身の体験をもとに講演を行いました。けやき教室は不登校の小・中学生を支援するための場所です。講演はご担当の角谷先生からのインタビュー形式で行われました。

濱さんのコメント：私は中学校の3年間不登校でした。3年生の時、某市の適応指導教室に通い、立ち直るきっかけを与えていただきました。けやき教室にボランティアで伺った際にこのことを担当の先生にお話ししたところ、「お母さんたちの前で話してみませんか」というお誘いを受け、お引き受けしました。私が苦しかった時に両親が大切に関わり続けてくれたことがありがたかったことを伝えたいと思いました。

会では10名ほどの不登校児の母親の方が私の体験談を熱心に聞いてくださいました。その場で出た質問から、お母さん方が子どもを大切に思いながら困難に負けず歩んでいる強い姿に感銘を受けました。私は、将来は不登校支援に携わりたいと考えています。今回の体験から、子どもの支援だけでなく、保護者の強さを大切にできる支援者になりたいと心の底から思いました。

ご担当の角谷先生談：濱さんの言葉は一つひとつに重みと説得力があり、参加されたご家族、スタッフの心に響きました。「今までのほっとさろんの話の中で、一番良かった」との感想もいただきました。ご自身のことを振り返り、お話しくださるのは大変な作業だったと思います。改めて感謝いたします。



<臨床心理学専攻>

臨床実習開始前実技試験を開催して

保健衛生学部 放射線技術科学科 教授 竹島 賢治

臨床実習開始前実技試験とは、4年生が4月から始まる臨床実習に備え診療放射線技師を目指す学生として恥ずかしくないように、患者接遇や撮影技術を熟知しているかを確認する試験であります。学生たちはすでに座学や学内実習で接遇や撮影技術に対して学習は終えています。しかし、今回のこの臨床実習開始前実技試験を実施する事により学生はスキルを再度復習し、万全の知識と技術を持って臨床実習病院に臨むことが出来るようになります。また、教員側も綿密なプランニングと照射録や予習用ビデオ作成も行われ、その熱量は非常に高いものでした。



日程は試験前説明会と試験の2日構成で、2つのゼミ合同の約20名で実施されました。試験では学生が模擬患者と診療放射線技師役に分かれ、現場さながらの緊迫したムードで試験が行われました。

私は昨年度まで公立病院に勤務し実習生を受け入れる側にいたのですが、事前に大学でこのようなカリキュラムと指導が行われていたとは知りませんでした。確かに鈴鹿医療科学大学の実習生は、患者の接遇や対応、簡単な撮影法のポジショニングなどが出来ていたので感心していましたが、大学でこのような大掛かりな実技試験が行われていることを今回知りさらに驚きました。

今後は実習生を送る側の立場となりましたので、どこに出しても恥ずかしくないような診療放射線技師を目指す学生を教育していきたいと思えます。

1年生の看護体験実習

看護学部 看護学科 教授 中井 三智子

看護学科1年生は2月下旬に初めての臨地実習を行いました。病院の様々な部門（検査部・薬剤部・栄養部・理学療法部等）で働く専門職の役割について臨床講義を受けた後、カンファレンスやケア場面で看護師と他専門職とが情報を共有し援助方針を検討する場面に触れ、チーム医療における看護師の役割を改めて学ぶことができました。受けもち患者と接する場面では緊張してうまくコミュニケーションをとれないこともありましたが、患者に合わせた言葉や話し方を考え、タッチングや身振りを加えるなど、これまでに学んだコミュニケーション技法を活用しながら関係性を作っていました。臨地実習を通して学ぶことができた、一人一人に合わせた援助方法を考えること、看護師の言動や患者の反応を観察し、意味を考察するといった学習姿勢は、これから看護を学ぶ基礎になります。多くの学生が、看護体験実習を通して成長を実感するとともに、自己の課題を見つけることができたことと述べ、看護の面白さに気づき、看護師として活躍したいという思いを強くするなど今後の学修の動機づけになりました。

新型コロナ感染の患者がようやく減少傾向にあるとはいえ、医療機関では日々緊急の対応に追われる状況が続いている時期でした。このような状況でも、学生の実習を快く受け入れていただいた患者様、医療機関のスタッフの皆様は心より感謝申し上げます。

令和4年度臨地実習Ⅰ・Ⅱを無事に修了

保健衛生学部 医療栄養学科 准教授 吉村 智春

医療栄養学科3年生の令和4年度臨地実習Ⅰ（給食経営管理）、臨地実習Ⅱ（臨床栄養学）を2月から3月に実施しました。令和2年度より2年間は新型コロナウイルス蔓延防止対策のために多くの実習施設が遠隔での実習になりました。しかし、本年度はすべての実習施設で実施することが出来ました。実習先の管理栄養士の先生方をはじめ皆さまに感謝しかありません。

臨地実習Ⅰでは、食事の計画や調理を含めた食のマネジメントについて経験し、高齢者施設での栄養・食事管理や衛生管理、栄養ケア計画など多くことを学びました。臨地実習Ⅱでは、栄養ケアマネジメントを通じて食事療養や栄養指導・相談を学び、チーム医療の現場を経験しました。学内で得た知識は、実習での様々な経験を通じて、形式的なものから実践的な知識へと変化し、学生たちはひとまわり成長して帰ってきました。

臨地実習Ⅰ報告会を5月25日（木）、臨地実習Ⅱ報告会を6月1日（木）にハイブリッド方式で実施します。令和5年度に臨地実習に行く3年生と実習先の管理栄養士の先生方、教員が参加します。今、4年生は報告会に向けて必死に資料をまとめています。参加していただく方々に胸を張って報告をする姿がとても楽しみです。

＜管理栄養学専攻＞

第3回卒後研修会に参加して

保健衛生学部 医療福祉学科 医療福祉学専攻 4年（令和4年度卒業生） 三好 伶奈

2月18日(土)に行われた医療福祉学専攻同窓会主催の第3回卒後研修会に参加しました。第1部では、令和4年度末をもって退職された松原新教授による特別講演がありました。先生は、これまでの人生やご経験をありのままの言葉で丁寧に語ってください、私自身、これまでの人生を顧みる貴重な機会となりました。

第2部では、1期生から15期生までの卒業生と在学生によるグループワークが行われました。グループワークでは、4～5人程度のグループに分かれ、現在の職業についての情報交換や今後の卒後研修会のあり方などについて話し合いました。私は、4月から市職員として精神疾患を抱えた方々の支援を行う予定であることから、先輩方に支援のあり方や難しさ、支援を行う上で大切にしておくべきことなどをお聞きしました。先輩方も親身になってアドバイスをくださり、大変励みになりました。また、今後、何かあった時に相談ができる場所があるんだという安心感を覚えました。

卒業生の方々と交流を持つ機会は、自分ではなかなか作ることができませんが、このような研修会に参加させていただき、大変勉強になったと同時にこれから先の自分の進む道が見えてきたように思います。このような機会を設けていただいた医療福祉学専攻同窓会の皆さまにこの場をお借りしてお礼を申し上げるとともに、今後の同窓会や卒後研修会の運営に協力していきたいと思っています。



新任教職員のご紹介



保健衛生学部 放射線技術科学科 准教授 細川 聖記

2023年4月より保健衛生学部放射線技術科学科に着任いたしました。着任前は、大学病院、民間病院、専門学校教員など、診療放射線技師として様々な業務に携わりました。研究分野としてはインターベンションや放射線被ばくの領域に取り組んでいます。これらの経験をもとに本学の発展に少しでも貢献できるように情熱をもって努めていきたいと存じます。どうぞよろしくお願い致します。



保健衛生学部 リハビリテーション学科 准教授 伊藤 卓也

本年度より保健衛生学部リハビリテーション学科理学療法学専攻に着任しました。着任前は、主体会病院総合リハビリテーションセンターのセンター長として、様々な分野の理学療法、リハビリテーション部門の管理、教育などを経験してきました。社会の中で理学療法士に求められる役割は変化しています。変化や進歩に合わせ、成長していける理学療法士の養成に尽力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。



保健衛生学部 リハビリテーション学科 准教授 藤井 啓介

本年4月よりリハビリテーション学科作業療法学専攻に着任いたしました。これまでに作業療法士として愛知、茨城、大阪といった様々な地域および領域で働いてきました。これまでの現場経験や教育経験を生かして、本学の学生により良い教育が提供できるように努めてまいります。また、研究および社会貢献活動を通して少しでも社会に貢献したいと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。



保健衛生学部 医療栄養学科 特任教授 村林 新吾

4月より医療栄養学科に着任いたしました。以前は客員教授として年数回お世話になりましたが、今年からはみなさまと一緒にしっかり学生を教えたいと思います。以前は調理だけを教えていましたが、医療栄養学科や鍼灸サイエンス学科の学生を教え、これからは栄養、集団給食、介護食、薬膳料理などさまざまな場面での食事を作ることを想定し、これからの社会に必要な学生を育てたいと思います。



保健衛生学部 医療栄養学科 助手 太田 鈴乃

本年4月から医療栄養学科の助手として着任いたしました。3月まで愛知県の中部大学大学院で、小麦依存性運動誘発アナフィラキシーというアレルギーについての研究を行っていました。スポーツ栄養に興味があるので、これから関わっていきたくて考えています。助手としては1年目で分からないことだらけですが、少しでも学生の皆様の力になれるように頑張っていきたいと思っています。よろしくお願い致します。



保健衛生学部 医療栄養学科 助手 中井 知奈

本年4月より保健衛生学部医療栄養学科助手として着任いたしました。これまでは食品企業に勤めており、製菓の販売に携わっていました。私自身本学が母校ということもあり、在学中の経験を活かし、学生側の視点や思考を心掛けながら学生のサポートに努めていきます。また、食を通じて相手を笑顔にできるような管理栄養士の育成に貢献できればと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。



保健衛生学部 臨床検査学科 助手 服部 由香

本年4月より保健衛生学部臨床検査学科助手に着任いたしました。これまでは病院勤務で、長きにわたり血液・凝固検査を担当し、その他採血業務や糖尿病教室、カンファレンス、後進の指導にもあたって参りました。これまでの経験を活かし学生が臨床検査に興味を持てるようサポートしていくとともに自身も成長できればと思います。どうぞよろしくお願い致します。



保健衛生学部 医療福祉学科 教授 齊藤 晋治

本年4月より保健衛生学部医療福祉学科医療福祉学専攻に着任いたしました。3月までは長崎県の大学で教鞭をとっておりました。専門領域は精神保健福祉で、専門職性についての研究等を行ってまいりました。ソーシャルワーカーを目指す学生の皆さんが、鈴鹿医療科学大学を卒業した後に自信をもって専門職ですと言えるよう、微力ながら尽力していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



保健衛生学部 医療福祉学科 助教 奥山 滋樹

本年4月より医療福祉学科臨床心理学専攻に着任しました。着任前は山形県、宮城県にて臨床心理士・公認心理師として、精神科やスクールカウンセラー、行政の子供家庭支援部署などで心理的な治療や支援に携わってきました。研究面では「ヤングケアラー」とよばれる、家庭内で大人がするようなケアを担う子どもや若者をテーマとしています。地域や社会で必要とされる心理職の養成に努めていきたい所存です。よろしくお願い申し上げます。



保健衛生学部 鍼灸サイエンス学科 助手 松岡 慶弥

本年4月より保健衛生学部鍼灸サイエンス学科の助手として着任いたしました。本学の鍼灸学科（当時）を卒業し、鍼灸治療院勤務を経て、本学の大学院にて学位を取得しました。鍼灸師としてだけではなく、スポーツやトレーニングの分野でも培った経験をもとに学生の皆様のお役に立てるよう、また、母校の更なる発展に貢献できるよう尽力いたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。



保健衛生学部 救急救命学科 教授 神藏 貴久

2023年4月より救急救命学科に着任いたしました。これまで国家公務員を11年、消防吏員（地方公務員）を14年、新潟医療福祉大学で救急救命学科の教員として6年勤務して参りました。救急救命士の資格を有し、科学者としても基盤研究などを推進しております。今後はどこに出しても恥ずかしくない学生→社会人の育成を目指し、また、本学の発展に微力ながら貢献していきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。



保健衛生学部 救急救命学科 准教授 坂口 英児

本年度より保健衛生学部救急救命学科に着任いたしました。これまで消防機関において21年間救急救命士として活動し、その後大学で6年間の救急救命士養成に携わってきました。救急救命士法が改正され、救急救命士は今まで以上に必要とされる資格になります。救急救命士に必要な知識や技術を学生に伝えていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



保健衛生学部 救急救命学科 助教 平井 聡子

本年4月より救急救命学科に着任いたしました。本学では、2017年より非常勤講師として医療英語を担当させて頂いており、引き続き学生さんのお力になればと思います。また、20年ほど鈴鹿に在住している身として、これまで大学祭や市民講座などにも参加させて頂いてきました。今後は、教員として少しでも貢献できるように努めてまいりたいです。どうぞよろしくお願い致します。



看護学部 看護学科 准教授 太田 志摩

本年4月より本学附属桜の森病院、看護学部看護学科に着任いたしました。これまでは麻酔科医師として手術麻酔、ペインクリニック診療、緩和ケアチームの活動に携わってきました。今後はこれまでの経験を活かし、緩和医療の臨床業務や教育に従事し社会貢献に努めて行きたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



看護学部 看護学科 准教授 三井 弘子

2023年4月より、看護学部看護学科に着任いたしました。主に、基礎看護学領域を担当させていただきます。私は、2021年3月まで本学の看護学科 基礎看護学領域で教員として働いており、この度、再就職となります。社会状況の変化や医療技術の発展に対応するために自己研鑽できる看護師を育成したいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



看護学部 看護学科 助教 宮田 瑠里子

令和5年4月より看護学部看護学科公衆衛生看護学領域の助教として着任いたしました。これまでは愛知県と三重県の市町村にて、行政保健師として地域住民の健康づくりに携わっていました。公衆衛生の面白さや保健師の魅力を学生のみなさまに発信していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



看護学部 看護学科 助手 上田 明里

令和4年9月より看護学部看護学科の助手に着任いたしました。担当は母性看護学です。JCHO中京病院・個人病院の産婦人科・外科病棟で約4年半勤務しました。助産師・看護師としての臨床経験を活かして学生の皆さんに母性看護の魅力をお伝えしたいと思っております。少しでも皆様のお力になれるよう日々精進して参ります。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

学生相談室通信

学生相談室長・保健衛生学部 医療福祉学科 准教授 綾野 眞理

新年度が始まってひと月が経とうとしています。みなさん、新しい生活にはもう慣れましたか。「ちょっと疲れてきたなあ」と、ゴールデン・ウィーク（GW）を指折り数えて待っている人も多いのではないのでしょうか。この間、新入生のみなさんにとってはもちろんのこと、在学生のみなさんにとっても、それなりに新しいことがあったのではないかと思います。実は、新しいこと、つまり今までと違うことに慣れていくということは、なかなかストレスフルなことなのです。たとえそれが嬉しいことであっても、変化は大きなストレスになるという研究もあります。ですから、とりえずひと月頑張った自分を褒めてあげましょう。そしてGWは、何でも良いので自分が「楽しいと思えること」をして、心のエネルギーを充電しましょう。ただし、急に時間ができたことで、何やら不安な気持ちがムクムク頭をもたげてくることがあります。例えば、「この学科でよかったのか、自分には向いていないのじゃないか」とか、友人関係について「私、本当は嫌われてるんじゃないか」とか…そして、休み明けのあの嫌な気持ち、「行きたくないなあ、…」という気持ちが押し寄せてくる。楽しそうな仲間たちの中で自分だけ不幸なような、ポツーンとひとり取り残されたような疎外感を感じたりすることもあります。休み明けの初日から元気いっぱいの人ともいますが、多くの方は最初の1週間くらいは調子が出ないものです。全然フツです。ただ、どうしても辛くてたまらない時、1週間以上すぎても嫌な気分が抜けない時は、思い切って学生相談室に話に来てみませんか？



おじさんの
独り言

「春の恵み、筍」

4月はタケノコのシーズンだ。おじさんは、タケノコが大好きなのだ。タケノコは「えぐみ」があるので、普通は「えぐみ」を取り除くため、「灰汁抜き」といって、糠を入れて茹でるんだ。なにに、えぐみってなに？ってか。この質問に答えるのはちょっと難しい。苦味じゃなくって、渋みに近いけどちょっと違う。渋みがタンニンだったら、えぐみはシュウ酸だとか。苦味がゴーヤで、渋みが濃いお茶、「えぐみ」が山菜ってところらしい。これ以上の説明は不可。分かんない人は試しに実際にかじってみるしかないよね。

おじさんが好きなのは、「灰汁抜き」をしていないタケノコを生のまま炊き込んだタケノコご飯なんだ。タケノコがホクホクで、香りが最高だよ。「えぐみ」が無いのかって？ それが無いのよね。「えぐみ」じゃなくって、「めぐみ」だよ、まさに春の恵み。タケノコは、土の中にあって採れたてで新鮮なものは、ほとんど「えぐみ」が無いんだ。だから、おじさんはその日に採れた新鮮なものをタケノコご飯にするんだ。スーパーなどで買ったものでは、残念ながらちょっと無理かもね。タケノコ掘りに行った人から分けてもらうのが一番かな。新鮮じゃないものを生で使ったら、それこそ「エグイ」ことになっちゃうかもよ。

ところで、タケノコは言うまでもなく、竹のこども「竹の子」だけど、漢字一文字で竹冠に旬、「筍」って書くよね。旬って、「食べ物が一番美味しい時季」のことでしょ。たとえば、アサリの旬は初夏で、赤貝の

旬は冬から初春の寒い時期っていう風にね。だけど、何でタケノコが「竹の旬」って書くんだ？ 調べてみたら、「旬」は、元々「10日間」を意味する漢字で、中国ではこの意味でしか通用しないらしい。そう言えば、ひと月を上旬、中旬、下旬と分けるけど、それぞれ10日間だよ。筍の旬の字はこの「10日間」という意味で、10日も経つと竹に成長してしまうというのが由来らしい。「一番良い時期」という意味の「旬」は、どうやら日本人が勝手に作り出したものらしい。タケノコはほんの短い間だけの食べ物なので、特に「旬」は無いけど、まさに春の恵みだね。

皆さんがこの文章を読む頃は、普通の孟宗竹のタケノコの時期は終わっちゃってるかな。だけどその後、孟宗竹のタケノコから1か月位遅れて、5月から6月にかけて、ハチクっていう「えぐみ」の無い、細い筍の時季がやって来る。これは掘るんじゃないから、おじさんにも簡単に採れる。土から30～40cmくらい出たものをカットするだけだからね。まさに、初夏の「えぐみ」、いやいや「めぐみ」というところか。「破竹の勢い」のハチクじゃなくって、「淡竹」と書くそう。読みは全然違うけど、本場中国と同じ漢字と言う。「ハチク」と呼ばれていた竹に中国語の漢字を当てはめたのかもね。それとも・・・。「淡竹」は音読みでは「タンチク」だよ。これが転じて「ハンチク」、「ハチク」ってなったのかも。これ、おじさんの勝手な孟宗、いや妄想だよ～ん。



『食で紡ぐ世界の絆』ウクライナと日本 ～食文化は生きる力、国の誇り、世界の誇り～を開催

2月28日(火)千代崎キャンパスの調理実習室において、『食で紡ぐ世界の絆』ウクライナと日本～食文化は生きる力、国の誇り、世界の誇り～と題した異文化交流を行いました。

ゲストに柏谷オーリャさん(ウクライナ出身)と小林ステラさん(モルドバ共和国出身)をお招きし、交流会の企画者である副学長でありボランティアセンター長の高木久代先生(鍼灸サイエンス学科 教授)、医療栄養学科の学生をはじめとする11名の学生、そして医療栄養学科の教員3名が参加しました。ロシアによる軍事侵攻が続くウクライナや隣国のモルドバ共和国の郷土料理を作ることで、お互いの食文化を通じ、それぞれの国に対して理解を深めました。

当日はウクライナの郷土料理である“ボルシチ”と、モルドバの伝統料理のチーズパン“ウンブルティータ”、そして日本の料理として加薬おこわと白きくらげを使った薬膳コンポートを作りました。

オーリャさんは、ボルシチについて「日本人にとってのみそ汁のように、それぞれの家庭の味がある」と説明し、学生に丁寧に作り方を教えてくださいました。ボルシチに入れるピーツを知らなかったり初めて調理する学生もいて、みじん切りにする作業では手を赤くしながら取り組んでいました。

ステラさんはウンブルティータについて、「日本人にとってのお米のよう。モルドバは小麦が沢山収穫でき、10kgを超える小麦で作ることもある」と紹介すると、学生からも驚きの声が上がりました。

オーリャさんとステラさんからウクライナの状況を聞いた学生からは、「さまざまな食文化がウクライナにあると知り、それが破壊されてほしくないと思った。良い方向に変わってほしい」、「今後のウクライナの状況にも関心が出てきた。平和に解決してほしい」といった感想が聞かれました。

この交流会は学生たちにとって、他国の文化や戦争などについて考える良い機会となりました。

＜ボランティアセンター＞



行事予定

2023年5月～8月

5月6日(土) 創立記念日
13日(土) 補講日
20日(土) 第1回夏のオープンキャンパス
27日(土) 補講日
29日(月)～30日(火) 春期定期試験と解説
6月1日(木)～2日(金) 春期定期試験と解説
3日(土) 補講日
7日(水) 春期定期試験と解説
10日(土) 補講日
17日(土) 第2回夏のオープンキャンパス
24日(土) 春期追・再試験

7月8日(土) 補講日
15日(土) 第3回夏のオープンキャンパス
18日(火) 補講日
20日(木)～22日(土)・24日(月)～28日(金)
前期定期試験
31日(月)～8月4日(金)
前期・夏期定期試験と解説
8月6日(日) 第4回夏のオープンキャンパス
7日(月) 夏季休業(～9月7日)
10日(木)～20日(日) 夏季一斉休暇
24日(木)～25日(金)・28日(月)～30日(水)
前期・夏期追・再試験

※上記予定は変更になる場合があります。サマスポおよびホームページで最新情報を確認してください。